して日未だ甚だ高からざるなり、レヲニダス乃ち最後の糧を命ず、青風陣頭を渡りて、馬も聲なく朝暉鎗刀に落ちて、千軍眸を凝す。レヲニダス乃ち大聲呼で曰く、今夜、請ふ諸君、閻魔と共に夕餐の卓を共にせんと。

選兵千四百、意氣斗牛を衝くも、今夕は盡く之れ無定河畔の骨。一死國に酬ふの意氣、愛すべきと共に、妻子兄妹を殘して、此の陣頭に立つの胸臆を察すれば亦悲むべきものなくんばあらず、然りと雖とも、既に此に至る、今日の事唯國家あるのみレヲニダス嘆喟幾回、遂に衆を提けて胸壁を出て、堂々敵を俟たんとす。謂へらく、矢種の在らん限り、刃の續かん程は、力限り、根限り、敵を屠りて、希臘人の名を聞きても、震慄するに至らしめんと。（未完）

文苑

人の世

佐々木信綱

木かげにうたふ老し人
芝生をはしる若き子ら

花の香、人を醉はしめつ
鳥の音、むねををどらせつ

春の色あふれたり空に
春の光みちたり野邊に

のどかなりや人のこの世
たのしきかなや人のこの世

あゝ見よかしこの森かげを
罪人のせし黒き馬車
町の方にぞいそぎ行く

煙

松寺久雄

こゝかしこ鶏なきて
をちこちに小鳥こゑして
世の塵を清くはなれし
曉の山かげの村

たちこむるもやのうちより
ゆくら〳〵大空たかく
のぼりゆく朝けの煙
見るだにもこゝろ樂しき

遠方の高嶺は暮れて
夕烏こゑにぎはしく
こゝの畦かしこの畔ゆ
村人のかへりゆく方

木がくれのこゝにかしこに
そらたかくなびきあひつゝ
たちのぼる夕けの煙
見るだにもこゝろ樂しき

つらき世のかぜにふかれず
都邊の風になびかず
朝夕たなびく煙
見るだにもたのしあはれ其煙

旅の空

つねを

ふるさと忘れ今ははた　うきこと繁き旅の空
雁が音きゝてをどり立ち　ははこ草の名慕はれぬ
あゝこひしなれし故郷
かすみこめたる山かげの　戀しき家兄いまいかに
花のにほひに胸をどり　月のひかりに涙おつ